遙か西の彼方ふるさとに続く道

去年は宗祖法然上人が学ばれた『往生要集』の著者である恵心僧都源信上人の遺跡を訪ねた事を記しました。『往生要集』には中国からさらに遡ってインドの御祖師様たちの言説が引用されています。法然上人の主著『選択本願念仏集』でも多くの引用がされております。しかし、御遺訓『一枚起請文』の冒頭は、「唐土（もろこし）我が朝に、もろもろの智者たちのもうさるる」から始まりますが、善導大師以外は自らの専修念仏の教えに異なる立場のお念仏として、インドや中国と国内の学説を位置づけ、自らの独自性を宣言されています。法然上人のお念仏の教えを理解するために、「観念の念にもあらず」と否定された教えをあえて理解することも必要かと思われます。

「唐土（もろこし）」とは、ただ中国を指すのではなく、遙か西域からインドまでの空間の広がりを指し、「もろもろの智者たち」とは恵心僧都源信上人から遡って、中国からインドに至る浄土教の祖師を指します。その時間と空間を超えて伝えられてきたお念仏の流れを理解した上で、口称による専修念仏による浄土宗の独立宣言の意義がより一層理解できると思います。

仏教が伝えられた時間と空間に関して、今春、地元のFM番組でお話をさせていただきました。お話は、昨年偶然に、中国自動車道の吹田ジャンクションで「AH1（アジアハイウェイ 1号線）」という標識を見つけたエピソードから始めました。宝塚市内を東西に横断している中国自動車道が、同時に東京を起点としトルコのイスタンブールへ通じるアジアハイウェイ 1号線であることの発見への驚きは広く共感されるのではないでしょうか。1959年に国際連合アジア極東委員会により提唱されていたものの、2003年、AH政府間協定に関する政府間会合で、日本も路線参加を表明したので、後に国内区間が、アジアハイウェイ 1号線に編入されたのです。無論、年代によっては常識だと言われるかもしれません。しかし、大きなイベントが開かれたわけでもなく、多くの人が知らなくて当然だろうと思います。

昔、私は海外でアジアハイウェイ 1号線を旅したことがありました。旧ソ連のアフガニスタン侵攻の前年1977年夏、アフガニスタンの首都カブールからパキスタンのラホールまでの区間を、ガンダーラ地方の仏教遺跡を訪ねて旅しました。アフガニスタンで後年タリバンに破壊されたバーミヤンの大仏を見学した後、首都カブールからカイバル峠を越えてラホールまでの国道を旅しました。国道は、1970年、第2回アジアハイウェイモーターラリーが、テヘラン - ダッカ間で開催されたので整備されていました。

歴史上のアーリア民族の西北インド侵入やアレクサンドロス大王のインド侵攻の通り道が現在も主要ルートとしてアジアハイウェイ 1号線となっています。そしてそこは、カイバル峠を超えて緑の大地へと大乗仏教のふるさとであるガンダーラ平原が広がっています。

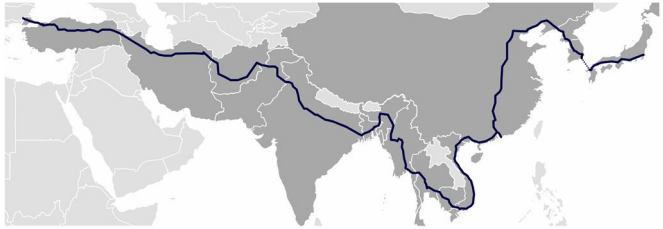
お釈迦様の入滅後、500年余り後、ゾロアスター教を信仰していたクシャーナ人がインドを征服する際に大虐殺が起き、仏教も弾圧され、存亡の危機を迎えました。新たな大乗仏教が生まれることで、仏教がクシャーナ人に信仰されるようになりました。この頃アレクサンドロスのヘレニズム文化の影響で仏像が誕生し、大乗の諸仏を眼前に拝み、救済を求めて仏国土への往生を願う信仰が広まります。

阿弥陀仏信仰が広まって、大乗仏教の代表的な思想家で阿弥陀仏信仰の浄土教の祖師である「空の思想」のナーガルジュナ（龍樹）と「唯識教学」のヴァスバンドゥ（世親）が活躍します。この大乗仏教の経典を求めて中国から5世紀初めに法顕が、7世紀には玄奘三蔵が、シルクロードを旅し、ヒンドゥークシュ山脈を超えてガンダーラにやってきました。先達の偉業により大乗仏教は中国へ伝わり、やがて漢訳経典や善導大師等の教えが日本へと伝来します。

「唐土我が朝に」と一枚起請文を奉読するとき、この歴史を思い、身近なアジアハイウェイ 1号線を目にする機会には、大乗仏教のふるさとガンダーラに思いをはせることができればと思います。

あみたぁばぁ

No.41



浄土宗　松 林 寺

http://syourinji.com